其組々十村添書を以郡奉行迄可上之。假令直に言上仕度儀有之といふとも、自今以後は村肝煎・十村肝煎迄書付可出之。但、肝煎共手前之儀於申上は、郡奉行・改作奉行迄書付出すべく、右兩奉行之事訴においては御算用場奉行に可申上、御算用場之者共に對申上品有之ば、大目付迄書付可出之。右之役人指置直に訴狀等於上之は、不及是非急度可被行曲事旨所被仰出也。

寛文十年八月廿八日

右被仰出候趣、百姓分は不及申、御郡に罷在何者に而も人々能合點仕候樣早速申聞、人々承屆候旨組切帳面に記、判形を取置、其旨十村手前より拙者共宛所に而書付可出候。以上。

八月廿九日

杉本治部左衞門
林　十左衞門
園田左七
河北彌左衞門
松原八郎左衞門
水上喜八郎
中村助左衞門
毛利又太夫

能美郡・石川十村中

六二　御城中除雪人夫之事

一、午十二月朔日夜深雪に而、明二日御城中日用三千三百人御用に候處、日用頭共手前より七百人指出候得共、殘分御郡より可指出旨、御算用場御奉行より大塚彌五太夫迄急ぎ申來候。此儀御郡奉行支配之儀に候得共、急成儀に付卽刻彌五太夫より、十二月朔日亥下刻之刻付印形之紙面を以、野々市村少左衞門・上野村十右衞門・淵上村源五郎・御所村長次郎・押野村宇右衞門、此者共に壹通充相渡、人數有次第差出候樣に申渡候。翌日御郡奉行に引渡也。

一、日用頭共より七百人之分は、御定之口錢日用頭取申候。御郡方より出候分は、日用頭に口錢相渡不申段、割場奉行に示談有之樣に御算用場奉行中に申達候。尤御郡より出候日用は、割場迄爲相詰可申旨、十村共に申遣也。

六三　十村共に被下候目錄之事

一、十村共に御目錄被下候節、向後人別に被下筈之由、戊午之十一月相達候事。元文三年之每日帳に委細有之候。

六四　走百姓年貢米等補償之事

一、十之內三つ請人、貳つ十村、三つ村中、貳つ近所村組合。

走百姓跡年貢米小物成不足分幷に作食米、跡々より如此割符に而指出候定也。寛文四年辰十二月朔日極。

六五　御扶持人十村死去之節收納帳之事

一、御扶持人十村死去仕候へば、收納帳改作奉行より取立上げ申候。御扶持人死去仕候歟、御扶持被召放候而も、御扶持高給人知に割出不申筈。

六六　百姓死後高分之事

一、百姓死後せがれ貳人有之候へば、高三ケ二者惣領、三ケ一者次男、其外子共高分願候得ば、相談之上に而相極也。

朱書。但是は元祿年中より前之格也。於改作所大概格相立置候品々之內に有之候。

六七　百姓追出跡に入百姓之事

一、百姓不屆有之追出申、跡に入百姓仕節、同村之百姓は入不申、他村より入候也。

六八　闕所之節家財處分之事

一、町人等死刑被仰付候刻闕所道具之事。刀・脇刺・懸物・茶碗・茶入之類公事場に取立上る。金銀は闕所銀奉行に上之、家財は町中に被下、町役に遣之候。但、女之衣類・道具は女に被下由。借銀・貸銀指引仕、餘り銀子有之候へば、是又町中に取之候由。百姓も同事。農道具は公儀に上る。尤公事場に上る也。